特別講演

Patient-Orientedの診療を行うために

上 田 智

(川崎医療福祉大学)

Application of the PO System in Patient-Oriented Medicine in Clinical Practice

Satoru UEDA

Kawasaki Medical Welfare College

The Problem-Oriented Medical Record (POMR) system was proposed as a new method for the writing of records by Dr. Lawrence L. Weed in 1969. This method is characterized not only by a new manner of writing medical records but also by a new concept of medical practice for patient-oriented medicine. Because of this concept of patient-oriented clinical practice, it has spread rapidly throughout the world. The two medical doctors who independently introduced the PO system in Japan in 1972 are mentioned in this report. This report describes the historical background of the PO system in the United States and how an entry is made in medical records according to the PO system in our country.

はじめに

20世紀後半の医学は目覚ましい進歩を遂げて現在に到っており、我々はその恩恵を享受しているが、医学・医療の進歩とともに、多くの問題も生じており、その対応は深刻な社会問題へと発展している。医学・医療が専門化し、細分化すれば医療は疾患指向が強くなり臓器中心の診療傾向となり患者不在の状態となる。脳死、植物状態、延命治療や体外受精、遺伝子治療の問題が論じられるようになり生と死の問題を先端医療との関連で考えなければならなくなり、医の倫理の問い直しが求められている。技術偏重は診断、治療の飛躍的進歩をもたらしたが、心の不在や医療費の高騰、医療資源の偏在などの新たな問題を提起している。そして社会構造の複雑化や高齢化社会の到来は全人的医療の必要性と医療福祉学の新たな学問体系の社会的ニ-

ズを生み出した。

医療は今やインフォームド・コンセントの時代となり医療従事者は患者への充分なる説明と患者の納得および同意のもと医療行為を実行する新たな医療従事者—患者の関係の時代となった。

このような社会的背景のもとで診療するためには、患者中心の診療体制が必要であり、全人的医療、チーム医療が求められる医療である。

ここに Problem-Oriented の医療体制の意義があり、Patient-Oriented の診療体制と読み替えば問題指向型（患者中心型）診療体系の出現とその普及となり今日に到っている。

POS の日本への導入

1972年聖路加看護大学学長の日野原重明先生が POS を紹介され、POS, The Problem-Oriented System; 医療と医学教育の革新のための新しいシステム、医学書院により看護婦を中心に全国的に啓蒙普及に努められた。同時に POS 研究会を結成し全国に看護婦を中心に教育プログラムを展開された。1992年には、日本 POS 医療学会へと発展した。

連絡先 (〒701-01) 倉敷市松島288
川崎医療福祉大学医療技術学部
TEL (086) 462-1111

一方1972年時を同じくして川崎医科大学学長の柴田進先生は、新設大学の医学教育の柱として POS を導入して患者中心の新たな診療体系で学生教育をする目的で、大学として POS を全面的に採用することの決断がなされた。

POS の創設者 ウィード先生のこと

Dr. Weed は、デューク大学、コロンビア大学、ペンシルバニア大学、ジョンズ・ホプキンス大学、ケースウェスタンリザーブ大学、エール大学等で教育と研究に従事した。はじめは、biochemistry, microbiology などの基礎研究に関与し、後に臨床に戻り臨床医学の教育の中で経験から、患者の診療記録が基礎医学で通常行われている記録方法と大きく異なることに気付き、臨床においても研究記録と同じ問題点を中心に記述することを提唱した。この構想は1956年頃からあったが、1969年に彼自身の著書 Medical Records, Medical Education, and Patient Care を公にし、Problem-Oriented Medical Record を提唱した。この考え方をいち早くわが国に導入し普及に努めた日野原重明、柴田進両先生の功績は高く評価される。

Problem-Oriented Medical Record (POMR) 問題指向型診療記録

患者の持っている問題点に焦点を合わせ、その問題点を解決する一連の作業システムである。このシステムは新しい方法で診療記録を作ることだけではなく、作成した記録を監査し、完全な記録に仕上げることである。

1) PO システムによる診療記録 (POMR)

I. 基礎データ (Data base)

患者の生活像 (患者プロフィール)

病歴主訴

現疾患

既往歴

家族歴

系統別レビュー (システム・レビュー)

診察所見

検査データ

II. 問題リスト (Problem list)

Weed によれば、本の内容を示す目次と索引にあたる表である。

カルテの冒頭に置くべきものである。このリストは病名 (診断名)、症状、所見、社会的問題や精神の問題が挙げられる。

III. 初期計画 (Initial plan) 問題一つ一つについて次の3種類の計画を立てる。

検査計画 (diagnostic plan)

診断上または治療上の諸検査項目の選定と実施

治療計画 (therapeutic plan)

投薬計画

教育計画 (educational plan)

患者および家族への教育計画

IV. 経過記録 (Progress notes)

①叙述的経過記録 (Narrative notes)

問題毎に経過状況を記録する。記録方法は、S, O, A, P の4項目に整理して記載する。

S: Subjective, 患者の主観的情報 (自覚症状)

O: Objective, 医師や看護婦がとり出す客観的情報 (他覚的所見)

A: Assessment, 医師や看護婦の判断

P: Plan, 診断, 治療方法, 患者への教育

②経過一覧表 (Flow sheet)

代表的データや所見の経時的変化を一覧表にして示したもの

V. 退院時要約 (Discharge summary)

経過記録のまとめで、最終的経過記録である。

S: 患者の自覚症状のまとめ

O: 他覚的所見のまとめ

A: 判断, 評価のまとめで、診断名, 病態, 未解決問題について記述する。

P: 計画のまとめ

以上を問題毎にまとめる。

2) POMR の監査 (Audit)

患者のケアについて質的監査を行う。監査の対象となる医療行為は、基礎データ、問題リスト、計画および経過記録の記載について適正な医療行為が行われたか監査する。

3) 記録の修正

監査により POMR の欠陥が発見されたならば、この欠点を修正する。

結 語

Patient-Oriented (患者中心) の診療を行うことは、患者に事実を充分説明し、患者の納得のうえで医療行為の同意をえて診療することであり、インフォームド・コンセントのうえに成り立つ医療である。

これからの診療記録は、患者も含めて人に読んで貰う記録であり、人に再利用してもらう記録である。そして教育、診療、研究に役立つ記録でなければならない。それには事実を正確に記載することである。

これからの医療は、重要な医療資源として患者自身を有力なメディカルの一員としての役割が果たせるように患者教育を行うことである。これは医療の質を向上させる上で大きな意義をもたらすものと考ええる。

最後にこれからの医療教育は、POS 教育を通じて患者のための医療を実践する人材の養成が求められており、高齢化社会の到来は包括医療と医療の多様化に対応できる創造的意欲の高揚と、Student-Oriented の教育環境での学習体制の整備が望まれる。

文 献

- 1) 日野原重明著 POS, The Problem-Oriented System, 医療と医学教育の革新のための新しいシステム, 医学書院, 1990年
- 2) 日野原重明著監訳 J. W. Hurst et al The ProblemOriented System; POS の原点と応用, アメリカに POS を普及させたハースト教授の書, 医学書院, 1987年
- 3) 川崎医科大学付属病院 POMR ガイドブック編集委員会編集 POMR ガイドブック第 4 版1991年

質問 (川崎医療福祉大・感覚矯正) 寺尾 章
POS を先生の医療情報学科ではどのように用い

られておられますか。

答弁

POS は、医療情報学科では、重要な教育内容と考えております。医学概論の科目の中で教えております。診療記録は医療情報の基礎であり、医療情報のすべてであります。カルテの内容を理解させる目的で、POS を学生に教えております。

高学年になり、病院情報システムの構築の実習に入りますと、診療記録は必ず参考資料として利用することになります。

質問 (ワールドオプティカルカレッジ) 内田 冨子

私は、この関係のお話を故筒井純教授より教わりまして、診療はもちろん学生の教育として problem oriented educational records という名前をつけて行ってみたことがあります。学生の教育のことで教えていただきたいと思います。

学生が問題リストを作成するのは比較적입니다ますが、問題解決をいかにするかという一番大事なところでいつも行き詰まってしまいます。そういう問題解決をする学生の教育の問題に関しまして何かポイントがありましたら、ぜひ御教示いただきたいと思います。

ご講演ありがとうございました。

答弁

問題解決のための具体的方法は難しい問題です。

問題リストができましたらプラン (診療行為) のところで、Dx, Rx, Ex のうちの Ex (教育、指導計画) で、視能訓練士としての患者指導を考えると、問題解決の糸口となるのではないのでしょうか。

質問 (東京医大) 原沢佳代子

POS システムを、従来のカルテ方式から変える時の良いタイミング、方法をお教え下さい。

答弁

POS システムを現場に導入する場合の重要な点は、この POS システムを必要と感じている人に使ってもらうことです。強制ではシステムの導入は成功しません。

できることから、できる範囲で、必要としている人達で、はじめる。パイオニアとして、POS システムの利点を力説して、拡める努力をする必要があります。

患者さんの求める医療をする方法として、最良の方法であることを強調して、納得させる努力をする必要があります。

システムを改めることは大変なことです。将来新しいシステムを導入する機会はきっとあると思います。それまで、こつこつと努力して下さい。